2020年1月18日（土）　琉球新報掲載　全10段　第29回琉歌大賞

第29回 琉歌大賞 発表

表彰式　テーマ『年』

日時：令和2年2月9日（日）

会場：恩納村ふれあい体験学習センター（ゆうなホール）

第29回「琉歌大賞」表彰式次第

【Ⅰ部】表彰式（午前10時00分～午前11時00分）

1. 第29回琉歌大賞主催者あいさつ・・・委員長 宮崎るみ子
2. 事業経過報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・事務局
3. 審査員紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・司会
4. 表彰

［児童生徒の部］
- ○大賞（1名）
- ○優秀賞（9名）
- ○入選（30名）※代表1名表彰

［一般の部］
- ○大賞（1名）
- ○優秀賞（2名）
- ○奨励賞（10名）
- ○入選（10名）※代表1名表彰
- ○特別賞（4名）

5. 審査講評：第29回琉歌大賞一般の部　審査委員長　波照間 永吉
　第29回児童生徒の部　審査員　大城 和子
6. 祝辞：恩納村長　長浜 善巳
　琉球新報社代表取締役社長　玻名城 泰山
7. さんぴん茶贈呈式：（株）琉仁カスタマーサービス

休憩

【Ⅱ部】祝賀の宴（午前11時15分～午後12時30分）

1. 幕開け演奏　※大賞・優秀賞を音曲にのせ演奏　沖芸大琉球芸能専攻OB会
2. 乾杯の音頭・・・・・・・・・・・・・・・・・恩納村商工会会長 渡嘉敷 勉
3. 琉歌即興大会
4. 閉会のあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・副委員長 宮城 修

＊＊＊第30回兼題発表＊＊＊

《応募状況》たくさんのご応募ありがとうございました。

一般の部		児童生徒の部	
作品総数	269首	作品総数	516首
応募者総数	112名	応募者総数	365名
国別数	4ヵ国	総合計	
県別数	6都県	作品総数	785首
県内市町村数	19市町村	応募者数	477名

※応募ハガキに記載のとおり、応募作品は主催者側において自由に使用できるものとします。

審査員（一般の部）

波照間 永吉	委員長	沖縄県立芸術大学	名誉教授
大城 和子	委員	恩納琉歌会	会長
島袋 重道	委員	元中頭教育事務所	所長
新垣 俊之	委員	沖縄伝統組踊「子の会」	
伊良波 さゆき	委員	沖縄芝居研究会	代表

審査員（児童生徒の部）

大城 和子	元喜瀬武原小中学校	校長
中古 啓子	琉球かるた同好会	代表
長 宗明	元古堅中学校	校長
村堅嶺 八重子	元恩納村立幼稚園	教諭

主催／琉歌大賞実行委員会　共催／恩納村・琉球新報社・恩納村商工会
特別協賛／琉仁カスタマーサービス　後援／恩納村教育委員会・恩納村文化協会・沖縄観光コンベンションビューロー・沖縄県文化振興会・NHK沖縄放送局・沖縄テレビ・ラジオ沖縄・FM沖縄　事業主管／恩納村観光協会

▼一般の部

大賞　琉歌大賞

重ねよる年や　お天授かいの
百十頂上のぼる　はなのきざい

名護市　伊波　興福

【寸評】審査委員長　波照間　永吉

日の連なりは月となり、そして月は年となって重なっていく。その年の重なりは、自分の力で達成されるのではない。天という大きな存在からのさずかりものなのだ。日々の歩みは千年の頂に登っていく美しい階を一段一段昇るようなものである、という一首。

今日の長寿をいたずらに誇るのではなく、天からの授かりものだということばに、謙虚な思いがこめられている。そして、その天から授かった毎日をしっかりと歩むこと、これこそが、千年の長寿を極める階段をのぼることになるのだ、という、素朴だが力強い思いの表白となっている。悟りにも似たこの思いは、作者の日常を穏やかで豊かなものにしてくれているだろう。世の人々の願う長寿、それは、特別なことで得られるのではない。ただ、自分の命を日々、しっかりと歩むこと。これこそが平安であり、命の頂上にいたる道である、という言葉には、天と地の間で穏やかに生きる人の充足した思いが感じられる。結句の「はなのきざい」（花の階）という表現が効いている。

なお「きざい」は階・階段・刻みをいう語として琉球語では当たり前に使われているが、日本語の大きな辞典には載っていない。そんな言葉を使って一首を締めたのもまた、作者の手柄である。

優秀賞（二首）

誇らしゃや恩納　琉歌詠みの泉
枯れる事ないさめ　千歳までも

那覇市　禱　キヨ

竜宮の年や　斯にがまたあゆら
珊瑚美ら海に　時ゆ忘てい

恩納村　安藤　順子

奨励賞（十首）

磯名ゆ撫でていて　泣ちゆる御年寄ぬ
胸内ぬ苦りさ　生みとうとうみ

読谷村　長嶺　八重子

ながらいてい居りば　年月ゆ重に
ひゃくとうじゆういちや　見事五世

読谷村　伊波　則雄

百歳なる年に　母親やあの世旅
子の方星なやり　わ身よ照らち

うるま市　前原　シズ子

年波や川の　流れ水こころ
漕ぎ戻ち見欲しゃ　恋の小舟

うるま市　前原　武光

恩納の輪の花や　玉の露かめて
年の節々に　世果報咲かち

宜野湾市　多和田　吉雄

帰て来よ産し子　云ちど送くたしが
幾年よ待ちも　顔も見らぬ

糸満市　上地　和夫

ウシデーク近かさ　九十年なてん
村ぐとになれば　はまてうどら

恩納村　島袋　敏子

戦場ぬ地獄　移住地ぬ哀り
年ゆ取ていみりば　夢がやたら

ボリビア　比嘉　久子

年幾ち取てぃん　忘るくとうねさみ
うるま耕地彼方　哀り苦りさ

ボリビア　平良　あきこ

国の為と思て　疎開する年の
船路旅渡中　海の底に

南城市　津波　美音子

入選（十首）

御縁あて我身や　入婿になやい
沖縄に十六年　暮らす嬉りさ

那覇市　金城　逸男

若葉から黄葉に　移る身が心地
寄よる年波の　かにも早さ

那覇市　宮城　盛吉

八十坂登てぃ　ひーよーい病め
ひとうぬしなさきに　生きるうりしゃ

宜野湾市　玉那覇　清子

年よ重ねてど　肝深くなゆる
人の成長や　こころ磨ち

豊見城市　比嘉　恒夫

百年の黒檀　芯からよ作て
しほらしゃ三線や　世世に響ち

中城村　山川　静子

令和初年に　生まりたるなし子
万ぬ徳かみてぃ　育ちみしょり

渡嘉敷村　新垣　光枝

年事に拝む　恩納岳頂や
登いぶさあてぃん　自由やならん

北谷町　渡邉　規矩郎

白髪頭上なても　年の算取るな
花咲かち見しら　八十ばんじゃ

金武町　伊藝　源一

この年になても　思じゃすさ初恋
い会いぶしゃあても　蓮の台

東京都　渡久地　芳子

人や初春に　年とゆる定め
のがす我が肝や　いつも童

那覇市　仲田　栄松

特別賞（四首）

平和世のさだめ　憲法九条あゆん
年とてんいのる　平和なゆし

国頭村　知花　實

年齢や人並みに　百歳迎けてい
肝や今青春　二十心

那覇市　與儀　喜省

年ゆ重にりば　病院のはしご
くすりデザートに　日々ぬぐらし

宜野湾市　仲村　好子

谷茶丘かゆて　三十余ぬ年に
介護士ぬうかじ　頭上にかみら

恩納村　長浜　はる

▼児童生徒の部

大賞　琉歌大賞

平成が終わり　年明けて令和
これからの時代　みなでつくる

仲泊小学校六年　冨着　空

大賞を琉語（歴史的仮名遣い）で表記すると

平成や終はて年あきて令和
新たなる御世や皆しつくら

【寸評】審査委員　中村　啓子

世紀の世替わりを経験した今年、年号が令和へと変わりました。

「令和」に対して、多くの人々が響きが良く美しく言い易く親しみをもてる語だとのことでした。児童生徒の皆さんにも、言い易く親しみ易い語であったことと思います。令和を詠んだ作品が多くありました。

受賞作品は、改元の年に相応しい内容で下句の「これからの時代みなでつくる」と云う句に対して全員の評価が高く、令和の時代の主人公となる作者や、児童生徒の皆さんの心意気が感じられました。うるわしく平和を意味する語句の通り、令和の時代を語人力を合わせて平和世を築きあげたいですね。大賞おめでとうございます。

優秀賞（九首）

新しい年号　令和むかえたよ
世界中の人の　平和願う

喜瀬武原小学校五年　外間　莉杏

戦争の悲げき　忘れてはならぬ
年重ね気づく　祖母の思い

仲泊小学校五年　パク　リア

年こしの夜空　うち上がる花火
みなの願いこめ　空でおどる

仲泊小学校六年　今村　心優

幾年か過ぎた　学舎を前に
思い出と感謝　胸に抱く

山田中学校一年　屋良　明里

令和元年の　新しい世界
未来への扉　開く私

仲泊中学校二年　浜元　姫依

令和元年度　我等主人公
時代切り開く　みなの力

仲泊中学校二年　長浜　乙葉

年が改まり　令和代を迎え
守り育てよう　島の歴史

山田中学校二年　宮平　桃花

我した学舎が　今年幕閉じる
山田っ子の歴史　永遠につなげ

山田中学校三年　佐久川　幸誓

たくましく生きる　祖父の額には
年輪のような　深いしわが

山田中学校三年　伊波　里都

入選（三十首）

新しい年に　ぼくがねがうこと
バドで全国だ　ぜったいかつぞ

喜瀬武原小学校二年　宇江城　浬

新しい年だ　ぼくがねがうこと
国語けいさんを　しっかりやるぞ

喜瀬武原小学校二年　日高　琉煌

六年になったら　英語がんばるよ
ペラペラと話す　それがめあて

喜瀬武原小学校四年　宇江城　陽

平成と別れ　新しい年号
沖縄の平和　幸を祈る

喜瀬武原小学校五年　金城　有香莉

新しい年号　ぼくたちの時代
心引きしめて　平和いのる

恩納小学校五年　白井　蓮喜

年明けて五輪　世界へと発信
かがやくといいな　みなのメダル

仲泊小学校五年　上間　百華

夏空のひざし　万座庭にそそぐ
五年生になったぞ　さけぶわたし

山田小学校五年　棚原　華鈴

平成が終わり　令和代をむかえ
心引きしめて　学習はげむ

安富祖小学校六年　宮城　琉愛

平成の年は　平和世のくらし
令和代の年も　平和祈る

安富祖小学校六年　松茂良　興世

新しい年は　学年が上がり
目標が増えた　心はずむ

安富祖小学校六年　儀間　ゆりあ

年こしの夜空　美しい花火
いつもよりきれい　心いやす

仲泊小学校六年　米須　綺愛来

新たなる年に　大好きな友と
新しい学校　みなでつくる

仲泊小学校六年　町田　叶愛

新たなる年に　新しい出会い
たくさんの友に　心はずむ

仲泊小学校六年　松田　菜花

年が進みゆき　母校旅立ちて
新たなる友と　共に歩む

仲泊小学校六年　田邊　蒼

大晦日花火　華やかな色で
新しい年は　胸が弾む

仲泊中学校一年　片野　千聖

令和元年度　新たなる時代
未来への一歩だ　胸ははずむ

山田中学校一年　松田　珠亜琉

これまでの歴史　たかし森見てた
年号は変わり　母校閉ずる

山田中学校一年　比嘉　洸晟

新たなる年へ　進みゆく我等
心はずませる　夢の未来

山田中学校一年　上原　りりか

平成が終わって　山田中最後
けれど前向きに　次の年へ

山田中学校一年　玉城　琉音

令和代を迎え　誕生する命
新しき年の　幸を祈る

喜瀬武原中学校二年　東江　遥花

令和元年の　はじめての祭
花火空高く　希望のせて

仲泊中学校二年　田中　翔瑛

新しい年号　広がるよ世界
変わらない願い　平和続け

仲泊中学校二年　喜納　風花

幾年を経ても　変わらない海を
守り続けたい　島の宝

仲泊中学校二年　米須　琉花

令和元年の　夏休み迎え
来年は五輪　心はやる

仲泊中学校二年　田澤　虎侑

今年最後なる　学舎を前に
未来への思い　友と語る

山田中学校二年　糸数　美緒樹

沖縄の歴史　今に受け継いで
未来へとつなぐ　令和初年

山田中学校二年　神谷　亜夢

戦世の悲劇　忘れてはならぬ
幾年を経ても　平和求め

山田中学校二年　岸本　愛紗

年を重ねても　気持ち変わらない
平和主張する　思い強し

安富祖中学校三年　金城　祐哉

年号がかわり　気持ちきりかえて
新しい目標　きめて進む

安富祖中学校三年　谷口　夕渚

令和年明けて　新たなるステージ
行くぞ甲子園　夢の場所へ

山田中学校三年　玉城　海吏

※各賞作品の並びは応募順です。

審査講評［一般の部］

審査委員長　波照間　永吉

今年度の歌題は「年（とし）（歳）」であった。年にまつわる思いは、人、それぞれに深く、また広がりもあろう。しかし、寄せられた269首の琉歌にはいくつかの共通点があった。すなわち、過ぎ去った青春と若い頃を偲ぶ思い、老いの年を迎えても心はまだ若いという思い、老いてさらなる長寿を祈る思い、そして、老いを嘆く思いなどであった。また、元号が「令和」に替わったことを詠む歌も多かった。このような「年」をめぐる思いは何時の世にも、また、洋の東西にかかわりなく共通するものであろう。すなわち人類普遍のテーマと言って良い。それを琉歌として、如何に斬新に、しかも多くの人々の共感を得られる歌として、作り上げていくか、それが歌詠みの腕の見せ所であるだろう。

恩納の村を誇る歌、桜花や松を年と共に詠む歌、老いと琉歌の学びを詠む歌、そして、親への思いを歌う歌もあった。寄せられた歌の数々を読み上げながら、作者の思いにひたり、その味わいのなかに身をゆだねた。私たちの祖先が生み出した琉球・沖縄の文化に包まれる心地よさと、それを受け継いで琉歌を詠む方々の多く居られることに心強さを感じたことである。

そんな中、沖縄戦の記憶、そして南米移民の苦難の歩みを詠んだ歌も寄せられていた。沖縄の発展の基礎にはこのような過去の歴史があり、それをけっして忘れずに歩むことが大切であることを、改めて知らされた。ミルクユガフーへの思いを皆さんと共にしていきたいと思ったことである。

審査講評［児童生徒の部］

審査委員　大城　和子

第29回琉歌大賞、児童生徒の部は、村内5校、村外1校から365名、516首の応募がありました。

一次審査では、各審査員が審査基準に照らして事前に100首を選び、その中から40首を選出しました。

二次審査は、審査会場に40首を展示、その中から上位10首、入選30首を選出しました。

今回は令和元年を迎えての類似作品が多く、大賞を決めるのに時間を要した。

良かった点としては、令和を迎えての各学年の新たな決意の作品や、次年度のオリンピックへの期待、恩納村の中学校統合に寄せる母校への思い、平和への思い等、作品の内容が多様に表現された。各審査員から下記の感想がありましたので列記して講評とします。

一、児童の自筆で応募して欲しい（文字から受ける子供の感性が読み取れない）。

二、作品内容は優れているのに、字足らず、字余りで残念な作品があった。

三、テーマに沿った内容の作品づくりに努力したい。テーマが空疎にならないように。

四、中学校302首の作品中、破調が90首あった。定型の「8・8・8・6」の音数律を逸脱し、破調となった作品があった。提出する前に何度も推敲して欲しい。

五、平和への思いや自然を大切にしていきたいという希望に満ちた作品に安堵した。

六、他市町村や海外からの応募が少ないので、もっとアピールが必要。

あいさつ

第29回「琉歌の里おんな『琉歌大賞』事業も国内外から785首もの応募を頂き盛況に開催できました。

これも、偏に関係各位のご協力の賜物であります、主催者を代表し心よりお礼申し上げます。

今年のテーマ「年（とし）」には、県内外、また海外からはポリビア、アルゼンチン、ハワイからの皆様の思いの込められた作品が寄せられました。

厳正な審査の結果、見事、琉歌大賞に輝きました一般の部、伊波興福さん（名護市）は、「階段を一段ずつ登るように、大切にゆっくりと年を重ねていきたいと思いを込めた歌を詠んだ」作品として、これまで29回の中で最高齢での受賞、また児童生徒の部では、冨着空さん（恩納村立仲泊小学校6年生）「平成から令和への移り変わり、また来春中学へ上がる自分自身の心境を詠んだ」作品としてそれぞれが大賞を受賞されましたことを心よりお祝い申し上げます。

その他の作品からも、自然・文化・社会情勢・南米移民の苦難などを詠んだ、実に様々な琉歌が寄せられており、特別賞を含む六十七首の作品が入賞いたしております。

このように、本村で琉歌大賞事業を開催してから29年、様々な想いをサンパチロク（八・八・八・六）に乗せて表現し、伝えて行くことで、沖縄文化を継承し、情緒豊かな心を育てる村づくりにつながり、琉歌の素晴らしさをより多くの方々へ伝承していけるものと考えております。

また、共催いただいております恩納村並びに琉球新報社、特別協賛いただきました琉仁カスタマーサービスはじめ、ご支援いただきました協賛各社に対し、心よりお礼申し上げます。

結びに、琉歌大賞のさらなる発展のため、引き続き関係各位の尚一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げ委員長のあいさつといたします。

委員長　宮崎　るみ子（一般社団法人恩納村観光協会会長）

株式会社 琉球新報開発（座安）
Tel(0980)53-3131　Fax(0980)53-5837